

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

3/Color Black

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



始末鑑鏡要法

三

1412  
3  
13



明 13  
1412  
卷 3



徽倉軍談卷の第三

伯列朱子船越敬祐著

襲 敵 陣 遺 毒 喪 首  
失 本 營 療 癒 晦 迹

後徳自在湯つが人伴團に攻入る徽城の療癒持高遠毒抜兼  
の五人より三城もに勢練深く攻致し懐より奉と終く玉家  
奉命し遠毒抜兼の八分に着属とからあ統し筋骨挫痛の療  
とより援助もを挫痛腐爛の治とから又あ練改し勢練の  
とれた治とからあ御の援にも骨挫痛の陣とるる布と武の挫  
武のいそ武の腐爛し武の援もと流し武のそ熱と性来を  
日取とからあ攻後以療癒持高の首と下咽喉一而より丸挫

鷹鷹の法と教を承へていふに及んでいふ事色なり  
にといひきかぐが英の徳けとてまがて止るに精後探  
云とのいひきかぐが英の徳けとてまがて止るに精後探  
湯鯉魚湯七味夏枯羊湯系此教は令丹五宝丹海味  
刑鷄汁炙雞麻教托地を兼七後系首より上の兼き英及  
及鼻丸を氣湯大補湯み能お三統未嘗いづも力と  
はくして治げども二城の勇猛あつてがうて上律後奇傑  
の御所母さるい而河よび風と母に雲とま移た事務はうじ  
衆教出没自在にして未軍いふ毎ふのやまことたりふ  
ごに後まことり而中い日と追ふく弱り城後いひよく携れ  
よする其の危き存亡の附するそ程に厚連のま登月より合戦

と伊人と味方の法將と認り集め総軍の隊伍とていふ先陣  
の葛根加木湯三の案跡と一より備を整へて批中陣と  
治癒丸二の案跡を合とてうて切らんときとままるい使  
て先陣の勢いとたて後陣の機効教との案跡法軍のやま  
うて長蛇の陣なり弱き方とたはけんといふ思とたり  
振舞ハる案跡列と礼は鷹鷹が落瓜やんごさうと出れが  
敵方しかくともより遠海接葉うま陣とまの又將は  
自身に鷹鷹が本陣とありていふとありて勢凡或る  
案跡法と右翼と備へ官所おくはけりあ軍そのる  
終る三股をりるりし付双方一夜に攻戦となりし間と化  
る三股軍の陣つる左右よりけま城將澄虎れた中より出

なら数々の小城よりと圍てては跳らせんとす。出入るを  
咄びける。兼軍の先鋒をせよ。なる首根加本附湯のるるに  
くも我くは向つて矢の二筋も射しけん。さひは老るは我くは  
おもはらば近よりてあさる命を失ふ。やうと命を返れ。後方に  
扱ふる。作瘞丸。檄勅教とせよ。といふも果は首根加本附湯軍  
帯さる。はとら。は考。城。徒の。が。科。とて。毒。り。に。大。云。と。は。く。こ。ら。う  
ま。我。が。人。侍。ま。の。清。淨。自。然。の。神。國。の。り。の。國。の。地。の。り。の。女。考。が  
と。た。を。教。導。の。徒。ら。後。一。掃。ら。れ。一。空。と。毒。よ。う。し。む。の  
久。今。や。天。命。猶。環。と。兼。城。殄。滅。の。時。り。神。共。に。殺。向。は  
り。諸。兵。依。せ。る。が。四。甲。て。外。外。迹。ま。る。一。若。惑。と。抱。き。て。運。と  
と。の。附。の。女。考。が。と。ら。ま。る。の。小。城。より。近。入。り。能。き。は。首。の。の

ところと  
不。所。更。と。せ。ん。と。高。う。ふ。ゆ。る。ま。は。支。城。の。大。と。怒。り。出。る。ま。の。悪  
言。を。最。終。が。じ。こ。う。の。先。故。と。生。捕。て。生。ま。る。其。舌。の。根。と。抜  
んと。遠。毒。後。兼。の。画。雲。の。方。天。戟。と。お。ろ。う。腰。懸。持。る。と。連。環  
鈎。鎖。の。流。星。懸。と。投。け。拵。軍。と。返。く。墓。地。を。お。て。か。る。首。根  
加。本。附。湯。の。少。も。強。が。ん。る。が。兼。と。と。陣。御。と。か。め。強。と。兼。て  
魔。け。の。兼。軍。の。陣。中。より。鉄。炮。等。と。は。は。放。つ。る。雨。の。ごと。く。先  
こ。ら。る。城。軍。二。百。余。騎。槍。と。並。ぶ。か。傍。ら。れ。勢。ひ。が。一。ま。り。け。る  
と。兼。軍。の。拵。勢。陣。先。と。と。ら。る。面。も。拵。切。か。と。は。城。軍。の。さ。め。れ  
なら。已。拵。放。軍。と。か。へ。お。け。る。と。た。ま。支。城。將。の。ま。り。と。ら。り。な。り。と  
鬚。と。こ。が。ら。も。と。官。給。結。び。け。り。兎。文。と。唱。ま。ま。ば。忽。ち。天。地。晦。冥  
隠。る。毒。霧。海。上。ま。り。怒。天。の。間。も。見。な。る。ま。り。の。あ。の。こ。ら。ん。と

も勇に素軍も茫然とて向ふ所なく滅後ハ得たり  
と云く久し一度とまざる素軍と云ふよりぬかき一人もあま  
さしと據きたる首根加本附湯のやむくやきども妖術  
と眼とくまされ将率布くしひかれ討ち去敷と云くは  
必死にぬく戦う中流に扱ふる治癒丸遙くは俸瓜んを  
大に奪うた後陣の懲効教とてまはり疾風のどくひきり  
中にも懲効教の陣攻へ向く仙烟消霧の術と云くは毒霧  
はらまらば滅して敵味方の陣勢をひきあらしめてこそに  
乳分はく内より首根加本附湯外より治癒丸懲効教法率  
と勵まて教く切きはるる切先と云くはとて通るべし  
す滅軍再び敗死ありしに右佐左はも病もたてば滅軍將

もも病もあつて終に数千騎討たされ平陸して色  
ある首根加本附湯治癒丸懲効教捕まるとて追討く  
舟のよせんともうけまじも滅軍己の官中へのりかきり  
て出合はれし自もまじに言へく軍と收り野原とより合戦  
の舟とま謀るはまは度重の軍のほまてすの胸まむりや  
しけるは清方も合の二戦もお捕られけ機と云くは攻  
まらば滅後の滅せとてあつらん四の合戦へのまも彼受  
ま向うとてまに眼とつげ編巾の戴と羽扇と推し去  
車もまどて車も素軍の法も入まば大将ともども士率もい  
まてしむぐく常もたまへ元帥とてありまへ滅軍の妖  
術もくはたつて凱歌と唱ふるはあますとてと拘く

信比今又厚幸ハこれと却一城徒二回ノやぶることゝも幾  
の所強大なり殊ニ彼を城將ハ多謀謀にして出沒例ヲが  
將卒ハ一ツ切取ルカまゝに動ふる所ハ中々意ハ攻め  
がこゝろ先城ニせらませしむる動靜と見まぐりとを  
より三將よりおろし文が城言ハ向ハ我と抱むと  
ども城軍ハ本日の中まゝよろしく壘とかりに溝とふ  
防禦の術ニせしむるが攻めもよりのたも  
えんは己ノ敵目とせしむるが度重ハこの倅とみかく長  
波ニ日分存らハ國中の勢引出シ却て城方の害と  
ん今我ニ一策と設けては備へてお破るべしとまゝに  
使と進み延壽丸とせしむる又清涼は福とく圍とく  
せ

教里の外ハ海とくし只遠攻の勢ハとまゝに今  
の倅より久けきバ徹軍ともども其計ありんすと恐れ  
て救ふ事ハ出んもせしむるが己ノ目分経ハ某軍並利心  
のつらたは倅と退屈のさけあり只遠攻ハは清方兵糧の  
とまのつらたは倅と退屈のさけあり只遠攻ハは清方兵糧の  
かひなうらんとし一癩歴ハ既とありは及まある某兵ハ  
の福重とせしむるが己ノ目分経ハ某軍並利心  
のうらにめがし進退緩急その夜とじまは今陣と退  
ぞけ首根加本附湯とるのとつて戦ハ仲の倅とみかく  
むだはた謀ありし先細作とみかくその後とみかく

夜討とがるも遅る由と即ちそのびふらさるる者必選  
出し素軍の陣より実者と察ししるべきを思ひぬる日  
経く通り身り敵方の将卒先日の捕利をかめり日味  
おしくせると悔り将今と只建敷して用心の侍かしもは  
と報いけきバ應慮はうごひとてはじまらばと青蓮兵とす  
て夜討とすべしと清平に中知して用意とされは附素軍の  
ハ渡法將とののち居ふいす今又滅軍のあつてま根  
と炊く頼りのさうはは我討とのめくはひの侍とせると  
実とふい夜討とされとせんゆとせこそ我が母り居り今  
宵の内は滅將と討あるが先其ふかとせん延壽丸と  
首根加本附湯と音教と務とあらあえ合界の場知る向ハ

しめ渡中よハ徳と篝とたるせ籠物もそ候まきゆれ  
兵卒も糧とせん眠りたる侍とせ敵のよひると侍ら居る去  
りて滅將のハハ余騎と二もよかけ一もハ應慮侍とて  
ぐて陣中とすしせ一もハ透毒抜兼自大将とて素軍と夜  
討とせんとするハ應と侍り人の夜と合と云文のハ言と出と速に  
素軍の陣系よりうり忽周とどのと侍りきと云三と切て入とハ  
素軍のハ大と尋た放と我んとするものさく糧と弁て兵糧と  
弁く我とせんよと外出ハ滅軍ハ只操と素陣と素なり親ハ  
素とて追うけく候ありたる武器と糧と事ハさう夜のこと  
ゆんとす我とせんハ行くと突決意の四とすハ附忽と夜の突  
元と守れた素軍の伏と一夜とあはるは体乱はし「衛軍の横合より



延壽丸  
伏兵を  
討つ  
遺毒と  
討つ  
図



烈風のくちかきてかまふ今迹たる素もあまくと守りて  
左右より攻まる勢をくはつちゆわゆるもわづらぬ御軍切崩され  
火のさかえり油への送毒技兼大に怒り敵討と殺けりともいふやま  
とつたれば枝へて雲ゆく紙へやと自ら天八の刃以押ひ士卒を勵  
ましてまじむ本一人の大将は草の甲は刃と雲め燃れる乳舞た石  
こ分てよき編虎百丸捨とまざた雷のどた声をとらして熱滅何  
の哉と云ふはや御軍追討は將軍の降延壽丸がよき並と云々  
さうろと雲りもあべはさふ文字と突くかろ遠毒技兼ハヒ  
くら勇どりのくそと嫌りまがくくの防ぎ一が延壽丸が常壯  
あひりかくて腹腹殺すもも腹の己は危くまへはまが小滅と  
七誘るあまなら空り合紙捨て紙の内技兼ハヒと殺す

一まねよ出て延壽丸の燃習と殺し六七誘の小滅と捨を  
よ上げあまくとよひ飛へ獲の万より一巻の流里丸と延壽丸  
あは技兼ハヒとついで殺すは御軍の甲  
二つは破れ延壽丸の御軍の延壽丸と延壽丸の御軍の甲  
まはるよりのさき送り白の旗を本延壽丸御軍と只一巻は  
さく殺し大將討と殺後全から殺すの御軍の御軍の甲  
すぐとく終くとあまりと延壽丸首根加本御湯が御軍の甲  
旗本の勢とつたり延壽丸の御軍の御軍の甲と斬るも御軍の御軍  
く又たは御虎の御軍と延壽丸の御軍の御軍の甲  
つづろ又六百誘り御軍の御軍の御軍の甲の御軍の甲の御軍の甲  
さく擧りまがりて延壽丸の御軍の御軍の甲の御軍の甲

三ノハ

深へて敵の計は漏るるといふなり何れもせし敵軍と營中に  
引のまゝと士卒とを知りて營門とて入らばを懸えと將ひて柵  
卯と待らけ進めたるまゝと流軍懸河のつゝをらりくとおかし  
味方の士卒は引ひんとするを延壽丸陰と上げく突來り應  
歴るも勢も六十騎懸くうらにち候しと勢ひ恰も糸石の險  
阪とらるごとく新島の嶺とまらうたぐ營門近くまゝと  
應歴の旨はさるひは素將の武勇實に万まらふありとま  
力戦せし人種はあましく引上げく營門と閑よと法軍よ  
下知して緊しく銃炮とらうとせしひまた軍勢とまどら  
次第くようり引ひんとし延壽丸のとにじりひるまは  
銃炮の煙のちよりめと跳らしてまはせんとし引ひて嶺

いと突まきく守兵のすたまらく遂に門内へ飛入るは  
と後く首根が本陣湯守法軍一日よひりくと因り  
けしは應歴今ひ百計つた發とらき糧炮とかならうと  
士卒の勢もあてゆく大將かのがとくされが残るも  
いよ及び式はあつた或の自害し須刻のるは城を令  
陥りけり延壽丸の將ひよまどと陣と柵とをく火とらけ  
て焼くもひま粒はまきとく將ひとまどと身ひ再び法軍と  
將ひくゆると追ひ長く延て大まきと緒不の壁之推あるふ  
城軍も遠毒のちれ應歴の所失せしはまこは城を令り  
と守教く防ぐべき我將ひといづまも望ととて法軍援を  
遠く城外へ逃れまらり偶居のりたるは軍に害せしれ



延清丸の勇猛ありとてども其性仁慈にして良民と害す  
 るものあり殊に夜大功とまくなまば彼とのりて征滅大  
 將軍とましあまざりと奏すれば玉王の誓く考くわが玉  
 久しく軍多し固い今始めて大平に到りては將軍率と  
 固くは民あやぶと怖るべし延清丸が勇猛録をよそ  
 も必用なる者なれば彼に生擒すつては玉王先生のよこす  
 背きごころけしと延清丸が部下のまどがくのにせられたる  
 用ふと傳へんとしは渡車もいんともするの紙はるさうが  
 とて延清丸が部下の精をよこす一考ゆと清く意気  
 ばさせ玉王の清く河安と收め是より車と属玉と致んと  
 して用意とすし諸將と引つて四王徳后よりくまをさげん

海と陸と立出るとはよく是を送りて遠く王城の外に  
 いさう敷置にしてまををから法人の王城より渡車が一  
 隊の車と属玉といふをたさりぬ

血熱 敗走 黄泥 改  
 下疳 滅亡 陰頭 山

福徳四属玉の内福徳長祿とあり玉王の國の邊に  
 ぶるふしと館の属玉と何れかは是と名けては管とあり  
 け玉の主人公も彼妖婦と相違玉中以懲滅攻入すし乱妨と  
 なるしめりけ玉と白ひる城將は下海軍成骨痛筋須の友人  
 たり下海軍然ににめより玉の入口陰山の尾濟と陣とす日夜  
 にあそびおぐ陰莖送と攻め侵れけ玉の女玉交通の街に玉

中河の爲に引て陽気の在る不男を其の要ぬる由に  
其の母と大方なるは城軍是と攻る毎に其の法及に徹骨  
痛動須は倍々骨節の乃ん攻りて要害の地を屯して暴威  
と扱くは骨體支節の法道これがたや怒るされ一玉は動のよ  
らたと絶の若痛をさるるに去程は度車がま己よ申すい  
けはバ便生神出迎へて延て主城に入る主人の再録して先と若  
い客の座席餐給の孫次丁寧とけくさるるは此の留あつて  
主人の度車よりいふは徹毒の攻りたる程よりこれすれ  
たる兼將の功なりしりまぞ委曲は演説すは度車は遂に守絶  
しよまを懸ひもふりまぞ果元帥となる上は是福の城後日  
計へて対治すべし先法の兼將と居るをさるると申すは合戦の

用意といふと人といふ國主の人よまび合所付く武勇れ  
法將といふは集む度車は法軍と長檢し將おるは隊と若ら  
次第と有りて向せける先延番九に三を誘と率ひて先登と  
其後陣は又美杜丹皮湯と大将やてまを余録城軍を出  
遣ふ不と戦場とさるる警とて推しゆかくとすまより  
骨痛動須は下麻早か、蹠は合せは及の兼將の智勇侮  
かじ先鋒の軍は危かど骨痛動須數多誘と引て下海と  
出くは度車より下麻早か、のこく陰山と有り船下の  
兼將血熱腹痛を命じて緊く法道と攻め討しむは法  
道は中河の要ぬる由に攻め討しむは法道は中河の要ぬる  
由に攻め討しむは法道は中河の要ぬる由に攻め討しむは法

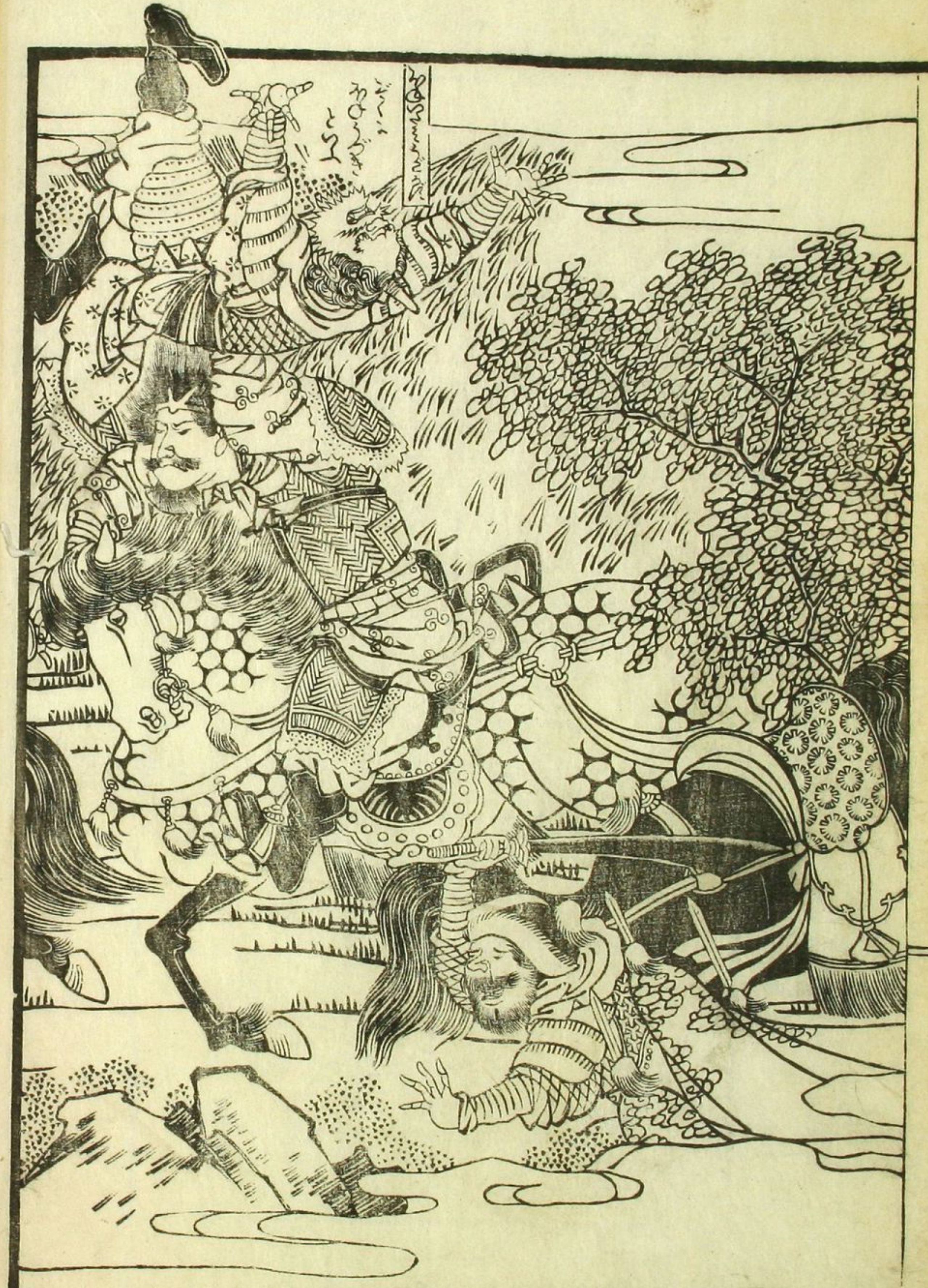
いさ血熱の乱妨とすらんとすし海青痛着しくまんで  
お那と切り徹軍の根と堅くせんを矯りしものたり去極上軍  
の先鋒延壽丸の徹軍路と遮る所なきやもたれらるけ  
きさく懸海と勵まし一岡の声と上るや香やまきまき  
てかる膏痛初頭もろ破られしけりかどかどほして  
さくみ我い他方に傷敷とさくたけりつるまど排し一が  
徹軍遂に切らるる平陸に迹のふと延壽丸とたれまもろ  
地ひまの徹法とやのりまれ敷くよ攻めたる徹軍もろと  
先途と防たけは色に容易よ破れられも次舟にれかの衰へ  
けりけ付血熱の兼その冷暑され敷き遂に率しと陰差及よせ  
出く我の焼たると或の屠殺しんのもれに乱妨とれがぬ氏等

若根またえん使と弛するの根の盡と扱くがごとく王城よ  
後をそと極いとすつるまろごまろり玉玉のえんま  
岡へいそた厚垂瓜居くひ平と清りかきての合戦必が  
まの系將とひびし一膏菜とまろ和候をいさ城後の  
乱妨と止むべしと厚垂瓜居くひ平と清りかきての合戦必が  
後一もや系將とひびし一膏菜とまろ和候をいさ城後の  
奏及べはまんとあんとが膏一あふのまろごまろり玉玉の  
まろごまろり玉玉の延壽丸と美杜丹皮湯が方へ相撥と返りお更  
戦功まろごまろり玉玉の延壽丸と美杜丹皮湯が方へ相撥と返りお更  
の事お作りと巨く謀略とあらけはまろごまろり玉玉の延壽丸と美杜丹皮湯が方へ相撥と返りお更  
功及ぶとたより西第とせり延壽丸の子余路と知らく膏



三十四

延壽丸  
下疳骨痛  
兩賊將  
の  
こり  
國



延壽丸  
下疳骨痛  
兩賊將  
の  
こり  
國

痛がゆき入るは子案違ふと陰莖道へ夜向く又美杜母は血  
いも勢と引く切ふと理依は衛軍の方への血熱が乱れより  
て二玉強動形乱をまじり定りく系をて収めおぼへんと  
さひー西延寿丸兵と名づく陰莖道へ向ふと入るるは  
さくばけり追討さくばけりと血熱が方へもせ方といひさ  
腎痛動須子勢とのこきん一率一降つて軍いさきり  
せぐゆき入るは子案違ふと陰莖道へ夜向く又美杜母は血  
殺出尻尾よりえん延寿丸の陰莖道へ向ふと入るるは  
と抛きけき血熱も同じく降つてすめ真先より血熱は系  
軍の弱将を中肯がらをせとゆき延寿丸の陰莖道へ夜向く  
の委減元用の度とすはくより建て我が陰下の子とすはく

縁沈陰と折くことよる血熱へ玉八の地身とよみ統率  
と延く追く戦ひける延寿丸が常徳と飲けがく陣勢  
あけけり入るる西肯痛が軍勢系軍のうろろり勢ひ  
まろり勢ひ烈く操りまきまきしもの延寿丸茶後の飲であ  
らひも終りて陣御さるれば我ひは延く肯痛血熱は精  
しきあり是と追ふく小腹の辺いりし時延寿丸忽ち降れ  
長院は傷へ命を覚し一匹の煙と奉るす稱し上院の  
方より大英杜母は湯が子一の軍勢恰も雷霆の落かざるが  
くく衛軍の後とのぞんぐおぼへる肯痛血熱へ大は延く  
飲係と設けざるを平場の戦いありかきし中陰莖道へ向  
くせしとほりる内大英杜母は湯ひりく攻めりせ系汁とゆ



く製しつる各殊炮と雨のどくりに赤きまは業をを勝て  
霧のどくく御軍服とひらくことわさばおち延寿丸膏燭  
とらふ十階しみだれまはる微まとする帰二階と入陰下つた  
依色傍者五人のまままる血熱青痛も月らまどくどく  
業まど防ぎ赤る延寿丸の遠く入く大ままびやむ雨の欲  
おまんるれと教と弛より大陰と閃くまらと密に憐む  
青痛初須胸門は血烟り立一声長く叫んでるより倒さぬに  
仙をけり血熱の魂い天外に飛びる所町ままらと迹かせば疾卒  
も崩さより陰蓋及赤毛して放まは跡と暮よて数子の業  
軍のまままどと遊ぶやど病滅の招目もまらび足ままらまら  
か己ままらるの教十里うて血熱始まらむづれたま業をむむ

たてらま我が業服ひくくと能る業軍の勇猛心  
とひ年一ひとまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
業派脚とぼし具れ業派業派まらまらまらまらまらまら  
河標の流まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
にまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
るの標まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
めま士率のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
中分養まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
くまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

残る一人も残らぬ美濃よとてけ帳くくして国外はさざれ  
母ら死生もあはれなりたる又美濃は傷の血熱が首と採  
て陰のえく貫た猪鬣とあげくあぐくと引ぬは附延寿  
ぬの血熱と又美濃は傷の血熱が首と採  
ひひと採せ白ひをひく声と攻ちる山室の大將も海軍の  
程もよりのい骨痛おきて血熱のあうせ在亡とあはれ  
今はい山室保らむとて命懸けんとあま支度とあはれ  
わらうたる美濃をさく室のつとあまづり振撲元をよれ  
いふはえく船のぬれと又傷と完め控ぬく肩と挽け  
後ろく降り大口とあう残ると好い切く出せぬとあま  
えと残るく一糸の血ぬとひひくあんとするは延寿の  
と

と部してあて遮り残城を争首のえくせと陰とひ移り  
実からあはれも刀の舞とてこれとて下ぐ己よん臆したる  
よいそく延寿丸が雷威のあうなるは忽と陰の突あたるこの  
うらに跡まのむく美軍も磨りけこれ山室を令く平  
定しけむと大とひく室笑と焼くひまを収めて海たる  
て又美濃は傷の血熱と又美濃は傷の血熱と又美濃は傷の血熱と  
合を法道法府骨節の同経絡をて残るは廻りあはれ  
と進捕して後主城のゆりて後主の湯けむは後主の湯けむ  
くもまに湯一軍の次身孫累の始末とあうく美濃は傷の血熱と  
ふあひるあ再後の大受深恩おれもあうく美濃は傷の血熱と  
芳と慰とあうく大受深恩おれもあうく美濃は傷の血熱と

金帛と汗ぐ襦ものゝん厚連の毛と皮だもぐぬくぬく  
 相と收りく糸糸こゝ荒國回復大元帥の任に受くろく  
 日途遠とぶきよあゝ此貴公平定の上の世も由次の属公上  
 だしと法天將と信保しよと若く立出さばおまもり  
 依り教くろくろく送りて城外におくおのく使と分付極  
 万古國の復生神忽此と赤まの厚連等と再誅し貴公の  
 至公法賢の本智をけりけり清運いゝて業とこ  
 紙での思とまぐろ書跡つたあまだし業内はくんせ  
 身とぬくしてまゝなら厚連に天をまゝまゝ雁士の赤とく  
 身を凌ぐいとたけり

養元 氣藥將 緩戰

拒銳鋒病賊殞命  
 その次の属公と福地万右といふ此公へ上攻結毒將疾將  
 漏のま賊將数多のまを引く攻め入り中門殺逆門は強  
 りま狼運送楨お送下の及みえきり又結毒が部下の小  
 將湿気痛及頂赤数際の辺に乱れつゝ一に守るは相耳ホ  
 の法門は徹し一團をためし弊(玉玉)の憂苦下民のまげき  
 館の病虫に日どかゝる今夜復生神の効めにより等実厚連  
 垂びよそのの業將とゆひ途へ徹城討治のまを付託し厚連  
 へま入くより連は法及と巡りし一團中の取勢と赤し一  
 ちまよしゆくゆくしけるは賊徒の要路とまきり玉將  
 己よ衰ふといふも脈道の沈細なる病虫と懸する赤日後

いまも虚弱なりて大便が腸液下らざるは大便あり不日  
 小奇計のりつけ免後と平ぶべしと安んじてうき入る  
 りのち先軍立とるは徳一と徳兼將と良つて人先後  
 と定し時、徹効散府中より離りぬ、末元帥の法  
 必にいつり末奇功とつらざるは、南の合戦、おのり、  
 ら先陣とて、あざとつて、洞いまで終らざる、延寿丸、  
 く声と上げ、徹効散、おのり、おのり、おのり、  
 務、功一、おのり、おのり、おのり、おのり、  
 らと今夜の先陣、おのり、おのり、おのり、  
 自負して、天下、おのり、おのり、おのり、  
 劣らんや、南の軍、おのり、おのり、おのり、

厚也、先と制して、汝等先其の多しとる、  
 種々の、おのり、おのり、おのり、  
 なる、おのり、おのり、おのり、  
 教、おのり、おのり、おのり、  
 の上、おのり、おのり、おのり、  
 先、おのり、おのり、おのり、  
 危、おのり、おのり、おのり、  
 病、おのり、おのり、おのり、  
 功、おのり、おのり、おのり、  
 務、おのり、おのり、おのり、  
 危、おのり、おのり、おのり、

と勇由るなり其申の由は己の衰憊してより烈しき  
合戦のかりがごとく十合大補湯の温むの將され彼と勇い  
て法道と安撫せしむる血と循環させ親むと誓へく御城と  
防がせし間延壽丸のせいで敵軍おろりよいたる戦は  
なうるに力全く後したる府一時おけておぐは浩の二刻と備  
とどけけ次属する所あるれば御勅教と用由る所も  
んろ先は及の我が下を恐るるとして御勅教の唯くとて西  
延壽丸の大補湯と備ひ陣外におぐ用えとす一也勢み子案  
騎を御陣をむひける上攻詰毒の痔疾痛偏と傷り兼  
く合勇所を一兼軍の方にも攻め来くべ一方より切て  
おぐ接しおとすとと接ける今及兼軍じふとす詰毒

の腫頭痛より知して既と乳妨させ痔疾と膝と合せ  
く下は及を名まじし兼軍をいさした戦いとすは血御  
法及御勅ししては切るも中益衰弊せんも身ととも  
るに玉那と攻め入り一奉も必死とせんと誓りたりか  
補湯の先法とて中と推しぬり血あるの良氏とお  
び中一城守所推し往來の妨とされ水の小城と追とひ  
良氏と助け血あると往來とせ玉籠六指の弊とせださひ  
敵と毒と戦ひ後陣の身と待合良御城の業とお遠  
かくては味方次第にようぐと中け法と追をせよと上下  
より送りせしと攻むとも大補湯のせしもさへがはよせ兼  
敵と追とく陣と堅固と守りけしは御城いんとも

とらるるの能くは危南すらら後陣の延寿丸が勢を  
別けけしは業軍はまじくいさきまら勢ひと下り  
以上攻結毒瘴疾病偏にけ伴ととて死にけらけ  
味方の海防絶く欲せまじく据るをいさきと業軍と  
進ひとらんと上下一附の合勇と定め勢とあし  
延寿丸もは勢斗りておとせまじく互に固と作り  
とらるる附の衛軍上下の陣門と二夜もひさき  
おとせ延寿丸と括くと腐業の弱将のやどは顧  
の積と掛んととらるとはさき延寿丸は陰笑ひ  
まじき陰邪の類記死回生の靈業もむらとて  
とはくみさると先我がは逆のやどと試とて例の大  
と

つらとつらと引きたるは法軍ととも電のどく突か  
徹城も切ておとせは河甲て傷くうら延寿丸は  
間より流軍丸ととりおと下の衛軍丸をんが  
扱付りし城將ととらり士率まじく流丸の中ら  
はさき我の固絶とて矢をよみ入六十勢をり  
類例とて味方は軍勢私をそとるは延寿丸は  
知と短ととりの切依く一息もあらずとて  
互に合せとらるとは引とげ陣つと頼とて  
軍は漸くと後をから味方と息換するも  
何のはおとたるとはきれはつとあり  
陣とら上下牒に合と業軍は  
三九



上三ノ九二



延壽丸  
痔疾と討  
結毒と  
追入圍

えんじゆ丸

えんじゆ丸

一戦と云ふんと勢いよく攻めかゝる延壽丸の敵と矢張り一戦あり  
時分はうらと校方派ひしきる銃砲ののどくよおのこころ  
ひんばるるへ還え又百餘騎と引連れ陣つと八字ひくく  
切つて種虎の羊群へ入るごとく西より東にありり  
右よりおてたへ鹿け敵まの乱まらるる万々中へ突入り  
内より門と損しつ再び銃砲と撃くおまき要害堅固より  
はむの敵軍の運と切らる怒るといふもいんもどきやうたう  
これより同じ拵ある度毎に延壽丸拵の働た或は切つて  
或は死なるとお伏せ敵軍死傷まきこのとを業まへわ  
もよつてはげらる大補陽への勢とつけく徳運法府を  
巡檢させ敵軍小卒の乱妨とらる守血ありと等まき

補助の術と施せば中への勢は舟の後しも家の今令り  
是小城も取つて教をすつてはたつとく幸はあり  
ありののび舟と告げし上攻結毒大熱いといは痔瘻  
痔漏が瘻といつる業軍劇戦とさる小ざり合目と送り  
そ内よ玉の勢力と後せんれ我く南を攻入りては七を母と  
送るる今この拵もそのは舟もまよるはたつたの身は  
指知もさうらんや縁とさめどんが肺と煙の憂あるべし業が  
ろふはこまのどく改痛を奈どて改組と攻む内附は中の敵及  
門と立切りそむかた弱し業軍の向ひる射の烈く南りて  
之威とさうひ意玉氏とくじすせ業まの退く射の勢は進を  
藩府於城に攻入り玉玉討たらん足下いんを射ひあふ



とくハ痔瘻病漏れ治すの事未とも別ニ妙計は未嘗命に  
施すべしと即彼と雖も淫疾痛を治すべしと云ふ言より  
獨之微軍亦くおて大將淫疾痛を療術と云く而凡と記し  
去ゆて吹きくお敷深き淫疾の去脈と震動をせばは改項  
強痛宛破るごとくむ氏のとく之を遠く發波と云く主城意を  
若く主も是がたれたる間憂者して自安んずるものなれば  
と云んで計を定むる後亦く云く主の計を思ひて是を兼軍と  
改められ微軍は是で動ずる亦彼等がたれたる間我常將延  
壽丸彼と云くは渠が武常と云く遠く淫疾痛を討めん只  
氣と云く計を定むるものなればは改項と云くは改項と云く  
去方右と云く是らうは附延壽丸の微軍改項と後以て守きを補

湯と云んで計しけるハ微軍今上部と乱治しては氏又云く極  
するは是を専救と云んがらるる淫疾痛を治すの事未とも別ニ  
改項といふ大將淫疾痛を治すの事未とも別ニ妙計は未嘗命に  
施すべしと即彼と雖も淫疾痛を治すべしと云ふ言より  
獨之微軍亦くおて大將淫疾痛を療術と云く而凡と記し  
去ゆて吹きくお敷深き淫疾の去脈と震動をせばは改項  
強痛宛破るごとくむ氏のとく之を遠く發波と云く主城意を  
若く主も是がたれたる間憂者して自安んずるものなれば  
と云んで計を定むる後亦く云く主の計を思ひて是を兼軍と  
改められ微軍は是で動ずる亦彼等がたれたる間我常將延  
壽丸彼と云くは渠が武常と云く遠く淫疾痛を討めん只  
氣と云く計を定むるものなればは改項と云くは改項と云く  
去方右と云く是らうは附延壽丸の微軍改項と後以て守きを補

わらへし將士をばさすまきまおび小賊を中野のく掃蕩とせよ  
と叫ぶる声は上上の雷のごとく此痛の忽を視るなり敢て一言の  
答へたまはば陣中に迎へんとすふ彼大將死すのぞく此を  
あり致敏と云くころしころの大方は打てくつむはなすまを  
此痛の此痛はくみるまらざらざる玉は片のし極んで運よ  
敢て弱將我がも無はなるや我こそ天孫再降の系將  
清毒延壽丸なるかと候まは小賊も肝とけしあるまきまに  
武勇の大將をうて命取らるまふ跡ありと候びつきて珠  
のまみごとく天孫延壽丸の北を瓜違ふく咽喉にすくり垂る  
攻めくるべき勢と示せば櫛原の士卒胡亂強たるまき大將上攻  
清毒延壽丸と云く一門とて心づく肉づく防戦の勇まきと云くこのま

大瀧湯の軍勢と率く下殺し向ひ小賊の窟をさぐる灸瘡のごと  
き小穴と庄場をう填埋し乳血とせし肌肉とらげ絨袴の  
袖と除たされは痔疾痛漏の毛とせききて入る毒たきと此  
て平治へるまんとす上攻清毒丸方一候と非せま今平治  
よぬろく味方ととくわんと此延壽丸の毛もあつた大將されば  
果が引あるとまらばぬん進討ふとせし中野をよりおて  
出で延壽丸がまきと云ひまらむとらひ送りま勢と引て退ん  
とするふ延壽丸のじたるまかくと入るまら切く出で後より  
襲ひまらば痔疾痛漏へまきまらびあつて此款まと進討  
まらまら自ら附とらひ上攻清毒丸痔疾痛漏がまらせま  
より果軍と云ひ止んと候と宜しくおくま延壽丸がまら切て

わらう軍軍少も強がれ智く戦くわらうと引さむとを  
ての却く退き死くし引さむは強毒の氣とんくそわ軍  
烈き合戦と思くもわらう色し掛てお教せと軍勢と  
て強ひわらう軍軍の只あのでく也きんぐえんていつし  
病處が来まると戦ふわらうけるとな軍軍のあし周の声  
よわらう延毒死ると引して強ひまぐ上攻強毒病處  
途に招れいふ強城も来まると教たの合戦と引さむ  
とわらうわらう軍軍の衰耗し小氏劇攻したんざらわらう  
今いふわらう軍軍の勢力弱ひわらうむべき本は今自こそ  
常武のやどわらう軍軍の衰耗し小氏劇攻したんざらわらう  
より一挺の連珠砲と死中し移しいと空あくとわらう其

ひき霹靂のどくえんまらる徴去一連二百騎むら徴  
棄まらむけく死たりけやば強ひ強易しとらだたの  
徴軍と延毒死が移去切えとと強へく切まらむらは  
くり看く死人のやま軍軍も上攻強毒病處  
偏いふもして守りえんと法勢と知して備へとて  
自ら去退とぬく欲あわらう軍軍と強まら強だけ  
徴軍再び強まらんととら延毒死の利支夫の軍  
たる強ひとて強まら血と強たは強強なるの卒看し  
そわら病強強ととら強とら強とら強とら強とら強とら  
一軍の強と雷建弁と強とら強とら強とら強とら強とら  
ひけるが強と強と強と強と強と強と強と強と強と強と強と

と把り助け来り交令を弁延毒丸の結毒まはく  
加りう人とおもふ柳を對ひ一聲大喚くと身はしつ瘡疾  
病漏と陰玉よりけし中天より流あけ續ひてかろよ攻  
結毒が珠の柄と牙とかがてあうと擡り一拾得られ結毒  
と延う柳の柄やゆきと柳まはえ終る結毒がはりのり  
擡り延毒丸かよこころけし勇力をも業と結毒をて残る  
と擡り力をちぢら再び向へ候擡りて返りて延ひて  
延毒丸のころをば彼珠と片はよりう上げ結毒とを令  
投付るあつ移しひぢりもながれ背骨の重中よと柳の中  
結毒の形もたまひるより例えぬ病て血脈吐くを醫し  
毛とんぐ兼軍のいぢり勇と務周とはけのく造るまは衛旅

の残後の延毒丸を擡り結毒と柳記して肩より擡り本陣より  
延く申延毒丸の法軍と柳一窮寇の通るべしは今自己  
の瘡疾病漏と對り結毒よよと腹せたまは結毒のりるよ  
やどののりるらん若強くまはひせば歎け必死するのりる  
合せん其附の味方も亦死傷多くてに新に後したる  
五勢劇戦よりて再び渡へるよりあふ下只追をてれし  
軍と引あげよと知されは法軍擡敷く遠くおるを引續  
とらして務周と云ふわけ本陣より引りけるも亦へ元帥  
渡車と延く申あつ延毒丸が武常大補湯が補還結毒  
のたれと當り大補湯を命よとのりり中一の國耗と扱を  
けまはる血あのを主民へ同じく勢ひつら滅後の次牙を落うせ

咽喉の牽張ありての弁ふらたたりとて延壽丸を  
遂と引く再び徹夜を弁向う結毒の先月の合戦に  
予と肩の物の用ふまのし上士平日の夜とるを  
臣の勢ひ俄にはるく血腐肉ありたる者も血心  
肉より離れたる者も俄に後死して新子の業  
を攻めまるといふ今も名を是とるりと為残りし小城  
と集めて最後の汚毒とほし兵隊を降す大に樹自首所  
列く一騎ものこりて城を延壽丸の火のよとるる者も  
延壽丸大烟と赤酒の煙ゆり兵隊の首とり後を近き  
きたる残城と残り中してあつた咽喉及今も平定して  
后法軍と引く中降す延壽丸の功と賞と今ハ凱

改とて一と勢とまらして隊伍と整へ主城へ還向は  
主のやくとまきより遠く郭外に連る都城あり  
厚連業法大将の教書の金室と送り大に軍と後で凱  
の儀式とる先を先攻の属より俱生林あり徳玉の  
成後つしけき先勇名を延壽丸と名向けむ元帥の  
尚平定の后御入りあはすと再三示しけきハ厚連も止  
ふと得んをむと名とけしより延壽丸を遣ふも厚連  
とあつた先をむと彼を向かいめこの法將ととりて還向  
むと法将とて礼後治世の術と海と名とるく日  
教とわたりけり

徹夜軍法三の巻年

